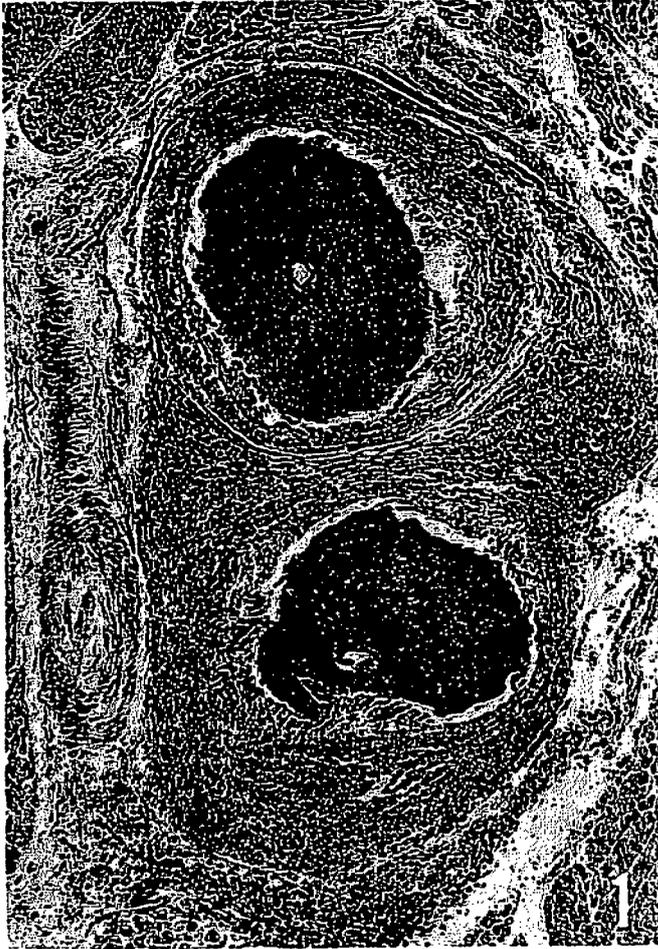


馬の心室中隔上部における寄生性小結節形成

競走馬保健研究所・第8回獣医病理研修会 標本 No. 118



中間種, 11ヶ月齢, ♂, 福島県産, 体重250kg, 昭和41年2月放血致死直後剖検。

昭和40年9月, 馬伝染性貧血の人工感染実験を行なうために産地より東京へ移した。伝食病毒血清接種後, 長短3回の熱発作, 可視粘膜の貧血および血斑がみとめられた。伝食病毒血清接種後161日目に放血致死。この間心電図学的検索により一過性の心房興奮伝播様式の変化, 房室部の伝導障害, 中隔付近および心尖部の心筋異常が推測された(日獣大家畜内科学教室の検索による)。

心臓は, 重量1.3kg, 心冠周囲41.5cm, 心室縦径14.5cm, 横径14.0cm, 厚径12.0cm, 右心室壁1.2cm, 左心室壁3.4cm, 心中隔壁3.5cm。これらの計測値からみた心臓形態には異常なく, 心筋の色やや褪色程度で肉眼的に著変をみとめない。

心室中隔上部の鉛直断面切片標本(配布した標本)において刺激伝導系房室束左右脚間のほぼ中央部(脚より約1cm離れた)の心筋に結節性の限局性病巣(約1.5×1.0×4.0mm)がみられた。その病巣は冠状動脈の心室中隔枝に隣在していた。病巣中央にはクチクラが明瞭な体巾約70μの2虫体断面(ある切片によっては1虫体断面)がみられる(中心部)。その虫体は核破片様物質を混じた好酸性均質物によって圍繞されている(好酸性物質帯)。さらにその外層に

は好酸球を主体とした円形細胞浸潤がみられる(細胞浸潤帯)。ある切片によっては異物巨細胞, 組織球および褐色色素顆粒細胞の出現, 石灰様物質沈着がみられる。さらに細胞浸潤帯あるいはその外層には肉芽組織の形成ならびに線維性結合組織(Fibrosis)の層(結合組織帯)があり, 病巣に隣在する固有心筋線維は萎縮化している(図1, HE×64)。また病巣内に存在するブルキニエ(以下「ブ」と略す)線維は破壊あるいは萎縮し, 「ブ」細胞内外には円形細胞浸潤および「ブ」細胞周辺に空隙形成をみる(図2, HE×404)。なを, 刺激伝導系房室束右脚には伝食心臓でみられるいわゆるリンパ様細胞が特殊線維の周囲に集簇し, その特殊線維は空胞形成あるいは萎縮を示す。以上の寄生性病巣は限局性であり, 他の心筋部位に虫道形成等も認められなかった。

文献ではUrman(1965)が馬において, *Strongylus vulgaris*によるAtrial cardiomyofibrosisの報告があるが, 本例においてもある種の寄生虫(*Strongylus*に属する虫体?又, 研修会席上では吸虫類?との意見あり)が馬の体内移行中, 大動脈根より冠状動脈に入り, 更に心室中隔枝に迷入し上記の病巣を惹起させたものと考えられる。